

アフガニスタン・カーブル市購入の一枚のローマ銀貨：ローマ貨幣の東方における波及に関する新資料

岡崎，敬

<https://doi.org/10.15017/2235329>

出版情報：史淵. 108, pp.21-46, 1972-08-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



アフガニスタン・カーブル市購入の一枚のローマ銀貨

——ローマ貨幣の東方における波及に関する新資料——

岡崎敬

1

一九五五年六月、アフガニスタンの首都カーブル市を訪ねた。仕事の余暇に郊外のムガル帝国の皇帝バベルの墓をたずねたり、カーブルのバザールを歩いたりするのがたのしみであった。バザールには装身具用の銀細工屋があつて、その作り方をみていると、いろんなものを出してみせてくれる。バルティア、ササン朝ベルシャヤイスラム代の銀貨がある。なかには縁に近く孔があいているものがあり、装身具として使用されたものがある。バクトリアの銀貨はさすがに少ない。これらの貨幣はアフガニスタン国内、ことにカーブル市近郊から集ってくるらしい。その中に CAESAR AVGVSSTYS の銘のある一枚の銀貨があり、どうもローマの銀貨のようである。パキスタンのベシヤワールでも多少資料を購入したので、ここでも何枚かを買ひ求めたが、このローマ銀貨はその中の一枚である。

この銀貨は径一・八—一・六センチ、表面がやや摩滅している。表は髪の毛のちぢれた人物のまわりに CAESAR AVGVSSTYS のローマ字が鑄出され、裏には、翼をひろげた勝利の女神が、円形の楯を両手でもっているところを鑄出している。大英博物館所蔵のもの (No. 409) をみると、表には、人物と文字のまわりに連点の圈をめぐらしており、裏には勝利の女神のもつ楯の中に S.P.Q.R. et CL. (V) の二段の文字がみとめられる。カブル将来品は、縁や表裏二面

ともに著しく摩滅していて、まわりの円圈や文字がわからなくなってしまっているが同一類のものであることは疑いない。SPQR は SENATUS POPULUSQUE ROMANUS の頭文字をとったもので、「ローマの元老院と人民」を意味している。

アウグストゥスの治世は紀元前三〇年より後一四年にわたり、その治世中、ローマ、スペイン、ゴールなどの各地で銀貨を発鑄したことがあきらかにされている。大英博物館のローマ時代貨幣を整理したハロルド・マッティングリーは、この類の銀貨が COLONIA PATRICIA（スペイン）であろうと推定しているが、正確な鑄造地にはふれていない。

註

(1) H. Mattingly; A Catalogue of The Roman Coins in the British Museum Vol. I, Augustus to Vitellius. London, 1965.

(2) ibid.

(3) ibid.



第1図 ローマ・アウグストゥス銀貨（カーブル購入）

2

インド半島の西南岸（マラバル海岸）および東南岸、セイロン島に一世紀より五世紀にわたるローマ貨幣が多量に発見されている。ウィーラー⁽¹⁾ (Sir Mortimer Wheeler) によるとマドラス西南の地域に一、二世紀の貨幣が多く分布し、「エリュトゥラー海案内記」⁽²⁾にいうインド西南岸の港ムジリスより、反対側の海岸のポドゥッケー商業地（アリカメドゥ）にむかった陸上路があったことを示すといっている。セイロン島ではいまのところ、ネロ（在位五四―六八年）、ヴェスパシアヌス帝（在位六九―七九年）以前の貨幣はなく、一世紀のおわりになって、はじめてセイロンを通じて東西の海岸

がつながれたようである。三一四世紀になるとセイロン島に俄然、ローマの銀貨が多くなる。

そのころ、ローマ帝国の東方にパルティアが対立していたので、ローマはアレクサンドリアを基点として海路、東方貿易を開拓せざるを得なかった。その様子は「エリュトウラー海案内記」にくわしく記されている。

同書に記すインド西岸における港に、ローマ側からもたらされるもの、ここから積出された物産を記しているが、ローマの貨幣の輸入を記す港に次のものがある。

1、バルバリコン（インダス河口）「…ガラス器と銀器と貨幣…」（第三十九節）

2、バリュガザ（現在の Narbada 河にそう Broach）「今日迄バリュガザでは古いドウラクメー貨幣が流通しているが、これにはアレクサンドゥロス以後に王位に即いたアポロドトスやメナンドゥロスの印がギリシア文字で刻印されている」、「…此の地方の貨幣と有利に交換される金、銀デナーリウス貨幣…」

3、ムーギリス（現在の Kranganur）、ネルキュンダ（現在の Kottayam）「極めて多量の貨幣」

これらの諸港の中で3のタミール地方にあたる地域に、現在ローマ銀貨が多量に発見されるのは、この地域との貿易が盛んであったというだけでなく、この地域にはもともと貨幣を発鋳する強力な王権がなく、むしろローマ銀貨がこれに代って用いられたことを示している。これに対し、バリュガザでは、西北インドのアポロドトス（前一五六—一四〇年）やメナンドロス（おそらく前三世紀の中頃）などの銀貨があったことが記され、二百年以前の貨幣がまだ通行していたのである。またナルマダ河以南のデカン高原にはアンドラ王朝があり、北のマウリア王朝の時すでに貨幣を発鋳していたので、良質のローマ銀貨は歓迎されても、シーウェル⁽³⁾ (R. Sewell) の説くように、これを鋳かして、再び現地の貨幣に再鋳造されたものと考えられるのである。「エリュトウラー海案内記」第三十九節によると「セレスの毛皮と綿布と生絲と黒色インディゴ」などがインダス川口のバルバリコンで積みこまれた。この「背後の内地にはスキュティアの首都ミナガルがある。パルティア人の王により支配されている…」（第三十八節）とみえ、このパルティア人は村川堅太郎⁽⁴⁾氏の説く如く、

アルサケス朝のバルティア人でなく、いわゆる Indo-Parthians と解するのが自然である。

註

- (1) Sir Mortimer Wheeler: *Rome beyond the imperial Frontiers*. London, 1954.
糸賀昌昭氏訳「大ローマ帝国の膨張」昭和三十二年。
- (2) "Peiripus Maris Erythraei"「エリユトウラー海案内記」は紀元一世紀の中葉、ローマ帝国領土エジプトのアレクサンドリアの人の著述になるギリシア語の文献で、ローマ帝政期における南海貿易の案内記である。日本では村川堅太郎氏のすぐれた訳注があり、本稿も、それによるところが多い。
村川堅太郎訳「エリユトウラー海案内記」（生活社）昭和二十一年。
- (3) R. Sewell: *Roman coins found in India*. JRAS. XXXVI, 1904.
- (4) 村川堅太郎、前訳書、一九一頁。
- (5) ヘレニズム時代、ローマ時代の東方、南海貿易について邦文でかかれたものに次の如きものがある。
柘植一雄「ヘレニズム時代における東・南方貿易の発展」秀村欣二「ローマ帝国とインド」——南海貿易に関する若干の考察——「古代史講座」13、三上次男編、古代における交易と文化交流・所収）昭和四十一年。

3

バルバリコンの後背にあたるバキスタンのインダス河上流より、アフガニスタン、ソ連領中央アジアにかけて、今世紀の初頭よりイギリス、フランス、ロシアをはじめ、近年にはイタリー、日本などの調査隊が加わり、古代の都市、仏教寺院址が調査され、それにとりもなう古代貨幣も整理されつつある。

紀元前、アレクサンドロス大王がイランよりアフガニスタンをへて、西北インドに侵入したが、前二四八年ごろバクトリアにいたギリシア人が独立して王国をつくり、金、銀、銅の貨幣を発鑄していた。これは王の像を表面に鑄出し、ギリシア文字で王名をいれ、現在、発見される貨幣より八名の王の名が知られている。ディオドトス（在位約前二四五—二三

○年）は、金、銀の両貨があり、この貨幣はインドではいまのところ発見されていない。エウティデムス（在位約前二三〇—二〇〇年）はシリアのアンティオコス三世とはほぼ同時であり、北はソグディアナより、アフガニスタン、バキシタンのパンジャブ、インダス河下流にまで勢力を及ぼした。エウティデムスの貨幣は南はアフガン・セイスタン、パンジャブに及び、ソ連領中央アジアにあるバルティア初代の都、古ニサの宝物庫²より、アレクサンドロスおよびバルティアのミトリダテス王（在位前一七一—一三八年）の銀貨とともに、この王の銀貨が発見されている。エウティデムス王以後、中央アジアより西北インドにかけてギリシア文字、王の側面像をもつ貨幣がさかんに発鑄されることになった。

エウティデムス王の子、デメトリオス（在位約前二〇〇年頃）は、アフガニスタンよりインドに侵入した。タキシラにギリシア的都市シルカッパが建設されたのはこの王の時代とされている。その貨幣に王の帽子に象の頭をつけたことはインド側の象徴をつけて、その住民の歡心をもとめたものであらう。デメトリオスが西北インドに重心をうつしたため、エウクラティデス（前一七五—一五六）はバクトリアで独立したので、ヒンズクシュ山脈以北のエウクラティデス、以南のデメトリオスの二王統が生れた。エウクラティデスの死後、そのあとをおそったのはヘリオクレス（在位前一五六—一四〇年）で、バクトリア最後の王である。中国側の記録に大月氏が大夏をたおしたことがみえているが、この時の大夏の王に比定されている。

その頃、カーブル地方にいたメナンドロスはデメトリウス王統と属するものと考えられる。メナンドロスはインドに侵入し、西北インドのシャーカラ（現在の Sialkot）に都した。パリー語の仏典にみえるミリンダ王³（Milinda）はこの王にあたる。メナンドロスの貨幣は種類、量ともに多く、その裏に仏教の法輪⁴をあらわしたものがあつたのは興味がある。メナンドロス王の貨幣はアフガニスタンのカーブルより、インドのマトゥラーの間に多く分布し、その一種はカシュミールに出土し、またインド西南岸のバリユガザにも発見されている。先にのべた「エリュトゥラー海案内記」によると、バリユガザではアポロトスやメナンドロスの貨幣が通行していたことを現実に証明している。

紀元前九三年頃、西北より遊牧民スキタイ(サカ)人が侵入し、ギリシャ人によるインド支配が崩壊する。バクトリア滅亡後のインドにおけるギリシャの諸王をインド・ギリシャ (Indo-greek) 王とよび、スキタイ侵入後の諸王をインド・スキタイ (Indo-scythian)、またはインド・パルティア (Indo-parthian) とよんでいる。これらの王名は幸い貨幣にあらわされているので、その名はわかるが、その王統、系譜などはいまだに不分明のところが多い。マーシャル (Sir J. Marshall) のタキシラ (Taxila) の発掘調査によって、これらの諸王の通貨が少なからず発見され、組合せが明らかになつて来た。このことは章を改めて考えることにしたい。

註

- (1) バクトリアおよび西北インドにおけるギリシア系文化については、左の著書によるところが多い。
W. W. Tarn; *The Greeks in Bactria and India*, Cambridge, 1951.
- (2) V・マツソン著、加藤九祚訳「埋もれたシルクロード」5、パルティア王の宝物庫、(岩波新書)一九七〇年。
- (3) 中村元「インド思想とギリシア思想の交流」昭和三十四年。
中村元・早島鏡正「ミリンダ王の問い」インドとギリシアの対決(東洋文庫)昭和三十八年。
- (4) W. W. Tarn; *ibid.* p. 263.
- (5) バクトリア、インド||ギリシア、インドリスキタイ、インド||パルティア、クシヤン朝の貨幣について主なものに次の如き図録がある。
R. B. Whitehead; *Catalogue of coins in the Panjab Museum, Lahore Vol. I. Indo-Greek coins*, Oxford, 1914.
J. Allan; *Catalogue of Indian coins in the British Museum, Greek and Scythic King of Bactria and India*, London, 1936.
J. de Morgan, *Manuel de Numismatique Orientale*, Paris, 1936.

インドにはじまった初期仏教寺院は、もともと仏舍利をおさめたストゥーパ（塔）の礼拝よりはじまったものであった。舍利容器も、石、水晶、銀、金など容器をかさね、また寶石、真珠、玉などの七宝を加え、タキシラ、ガンダーラよりアフガニスタンにかけての仏塔では錢貨を多くともなっていることが指摘されている。この中にインド・スキティア、インド・パルティア、クシヤン朝をはじめ、ローマ、東ローマ、ササン朝ペルシアなどの貨幣を含んでいることがあり、ストゥーパの製作年代の比定、ひいては初期仏教美術の成立についての多くの示唆をあたえるのである。

もとより出土貨幣の年代は必ずしもストゥーパの年代ではなく、その上限を示すにとどまる。ことにクシヤン朝などの各王の実年代なども決定していないものがあるので、ストゥーパの様式、舍利容器、他の遺物などの組合せなど慎重な手つづきを要することはいうをまたないところである。

もとの西北インド、現在のパキスタン領にあたるタキシラ、ガンダーラ、スワットなどに以上のべた時代の都市や仏教遺跡がある。

タキシラは一九二三年以来、二十二年間にわたり、マーシャルらインド考古局の手で調査され、ビル丘 (Bhir-mound)、シルカップ (Sirkap)、シルスク (Sirsukh) の三つの都市と、この近郊の多くの神殿、仏教寺院などが発掘された。シルカップはインド・ギリシャ王メナンドロスによって建設された公算が多く、シルスクはクシヤン代ヴィーマ・カドフィセスの創建と考えられている。

シルカップでは、インド・スキティア（サカ）、およびインドパルティア、クシヤン代前期の貨幣が圧倒的に多く、クシヤン代のものではクジュラ・カドフィセスのものが多きをしめ、この王の時に、タキシラをその支配下におさめたものだと考えられる。クジュラ・カドフィセスの在位はほぼローマのアウグストゥス（前三〇—後一四年）、ティベリウ

表 1 タキシラ・ビル丘 (BM), シルカッパ (SK), シルスナク (Sirsukh) 発見貨幣共伴関係 (F. R. Allchinによる)

Sirsukh			
	Vasudeva		Sirsukh
	— Huvishka		
	— Kanishka		
SK I	Vima Kadphises	Soter Megasthenes	SK I
SK II	— Kujula Kadphises	— Azes II	SK II
SK III	Hermias	— Azes I	SK III
SK IV	Hippostratos	— Azilises	SK IV
SK V	Zoilus II	— Maues	SK V
SK VI	Apollodotus II	— Sasan with Spalys	SK VI
SK VII	Lysias	— Vonones	SK VII
	Antalcidas	— Spalys	
	Menander	— Vonones	
	Strato I	— Spalys	
	Agathocles	— Vonones	
BM I			
BM II	Demetrius (I or II?)		
BM III			
BM IV	Silver bar coins (found also in hoard with coin of Philip Aridaes, C. 317 B. C.)		
	Round and concave silver coins		

ス (後一四一—三七年) 帝とは併行していると考えられるのであるが、シルカッパにおけるローマ貨幣の出土はきわめて稀である。

タキシラのビル丘、シルカッパ、シルスナク三都城の発見貨幣を、アルチン氏⁽⁶⁾ (F. R. Allchin) がその共伴関係を中心として整理しているが、シルカッパの上戸 (最後期) になってクシアン朝の貨幣があらわれ、シルスナクはクシアン朝の

表2 タキシラ・シルカッパ発見古代貨幣一覽表
(J. Marshall "Taxila" および高田修氏論文による)

層序	深 さ (m)	推 定 年 代	ペンチ 刻貨	タキシ ラ貨	ギリシ ア王貨	サカ・ポ ルタイ ア王貨	クシヤ ーン王 貨	計
I	0~0.6	第Iクシヤーン時代 約 65 A.D	4	128	97	725	438	1392
II	0.6~2.7	以後、ポルタイア族時代 約 25~65 A.D	19	312	316	2939	2165	5751
III		サカ・ポルタイア後期 (約 85 B.C~25 A.D)						
IV	2.7~4.0	サカ・ポルタイア時期	3	36	28	258	33	358
V	4.0~5.5	インド・ギリシア人時代 約 190~85 B.C	6	26	30	61	5	128
VI								
VII	5.5~6.7	ギリシア人侵入以前						
		計	40	502	471	3983	2641	7629

ウス帝の Denarius ばらばらになったものが出土したことを報告している。いまのところ七、六二九枚にのぼるタキシラ発見の貨幣の中でローマの貨幣はきわめて稀少であるということができた。

ラフルビンディの近郊に Manikyala の大塔⁽⁵⁾(コート・デ・Court's Tepe)がある。一八三〇年ストウバの下石室、銅甕、銀壺、さらには金壺といった舍利容器のセットに、貨幣が組合さって発見された。三フィート下にウ

貨幣が多きをしめる。
ダルヘラーシカ (Dar-marâjika) 寺塔の一小塔 (第四塔) からタキシラにおけるインド・

スキタイ王アジリヤス Azilises (在位前四〇一五年) と、Lugdunum (フランスのリヨン) 鑄造のローマのアウグストゥスの銀貨各々一枚が相伴して発見されている。このほかウィラー⁽⁶⁾によればタキシラではティベリ

イーマ・カドフィセス王銅貨（一枚）、カニシカ王銅貨（三枚）、が見出され、一〇フィート下の石室中に銅甕があり、ヘルマイオス・ルクジュラ・カドフィセスの銅貨（一枚）、ウィーマ・カドフィセス銅貨（一枚）、カニシカ銅貨（二枚）、その他四枚計八枚を計える。さらに銀壺一個があり、中にローマ銀貨（七枚）と金製小壺が発見された。これで見ると、カニシカ王を下限とし、フヴィシユカ、ヴァスデーヴァ王のものがない。ローマ貨幣はすべて帝政期（Republican Period）のものであるが、長い流通の間に損傷して、何帝であるか明らかにされていないのは残念である。パンジャブ州、ハザラ県のバクリ（Pakli）ではアウグストゥス帝銀貨一二枚、ティベリウス帝銀貨二枚、ハドリアヌス帝（一一七—一三八年）銀貨一枚が一括遺物（hoard）として発見されている。

ベシャワル市近郊に古えのガンダーラの地にあたる。このあたりは回教地帯に入ったため、平地にある古代寺院は破壊がひどく、ストゥーパの形さえみとめられなくなったものが多い。市の東部シャー・ジ・キ・デリー（Shah-ji-ki-dleri）のいわゆるカニシカ大塔（一名雀離浮図）は一九〇九年、スプーナ（D. B. Spooner）によって発掘され、カニシカ王の「元」年に製作したことを記す青銅製舍利容器が発掘された。塔基は現在一辺一八〇フィートをはかり、タキシラのダルマラージカ大塔（一辺一三一・〇フィート）、マニキァラ大塔（一辺長一六三・八フィート）よりも大形である。法顕、宋雲、玄奘などもカニシカ王の創建と、その壮大な規模をつたえている。舍利容器中には、六角形水晶に孔をうがち、舍利をおさめたものと、円い粘土の封印を入れており、容器の外にカニシカ王の貨幣一枚を納めていた。カニシカ大王の埋葬納としてはいささか少ないのは不思議であるが、むしろストゥーパの壮嚴などに力点をおいたのかも知れない。

ハイバル峠をこえ、アフガニスタンに入るとやがてジュララバードにつく。ここは古えの Nagarahāra だ、玄奘の「大唐西域記」には那揭羅曷国と記している。この近郊にはフランス調査団の調べたハッダ Hadda 一九六二、六五年、京都大学の水野清一教授らの調べたラルマ Lalma など仏教遺跡が少なくない。

ジュララバード西北にあるビーマラン Bimaran 大塔（第十塔、Pannin の Bimaran Tepe 2）は、一八三〇年頃、

マッソン (C. Masson) によって発掘された。滑石製の舍利容器の中より黄金製舍利容器、アゼス (Azes) またはアゼス二世の金貨が発見された。これらは現在、大英博物館に所蔵されている。ローランド⁽¹¹⁾ (B. Rowland) は、ビーマランの舍利容器をローマの石棺彫刻などと比較して、後二―三世紀のローマ後期アンティック美術に対照すべきものと考えている。

ジェララバード南方西より数キロにあるアヒンポッシュ⁽¹²⁾ (Ahin-posh) のストゥールパよりローマ貨幣が発見されている。(現在、ロンドン、大英博物館蔵) これは一八七八年、イギリスの軍人シンプソン W. Simpson によって発掘され、塔の内部より黄金舍利容器とともに二十個の金貨が発見された。このうち、十七個はクシヤン代のウィーマ・カドフィセス、カニシカ、フヴィシュカの貨幣で、三個がローマの皇帝ドミティアヌス Domitianus (在位、八一―九六年)、トラヤヌス Trajanus (在位九八―一〇七年)、ハドリアヌス Hadrianus の皇后サベナ Sabina (二七―二七) の金貨であった。

水野清一先生はこのあたりの調査報告に「チャハルバーク仏塔群の東方に一つ仏塔が見出されたが、それがアヒンポッシュ群の一塔かもしれない。われわれは日時の関係でここからひきかえした」と記している。

水野隊のいうシアーク仏塔群は、出土のクシヤン代貨幣よりみて、一世紀の製作にかかり、チャハル・バーク仏塔群は二世紀のものが多く、アヒン・ポッシュ大塔も後者に属するものである。

ジェララバードの南郊にあるハッダは、ストッコの仏像をもつ塔のある寺院が多い。ハッダ第十塔⁽¹³⁾ (Tappa Kalan) から東ローマの皇帝、テオドシウス Theodosius (在位、四〇八―四五〇年)、マルキアヌス Marcianus (四五〇―四五七年)、レオ Leo (四五七―四七四年) の金貨五枚と、ササン朝ペルシアの銀貨二〇〇枚をマッソン C. Masson が発見している。ササン朝ペルシアの銀貨のもっとも新しいものは、カワード Kavad (四八八―五三一年) であるというから、六世紀初頭の製作になるものであろう。カワードの次の王ホスロー一世 Chosroes I (五三二―五七九年) は、西トッケット

結んでエフタルをやぶり、カブールより、インダス川上流まで攻めこんだので、これ以前の奉獻になる公算が多い。

ベグラム Begram はカブールの北方チャリカル⁽¹⁶⁾の東、ブルジ・アブドゥラにある古城址で、フランス調査隊が一九三六年より四二年にかけて、さらに一九四六年に、発掘調査を行ない王城の址を明らかにした。ことに一九三七年より四〇年にかけての発掘で、宮殿址よりインドの象牙浮彫板、ローマのガラス製品、ヘレニズム時代の青銅小像、漢代中国の漆器片などが発見された。これは、年代よりいえば一、二世紀代の製作になるもので、三世紀に入り、ササン・ペルシャのシャプール一世（在位二四一—二七二年）の軍がアフガニスタンに侵攻した際、埋没した可能性がある。ここでも多量の古代貨幣が採集され、ギルシュマン⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾ R. Ghirshman が発掘を指揮した一九四一年より一九四二年にかけて三八〇枚の貨幣が採集されている。これを分類すると、インド・ギリシャ時代四十九枚、インド・スキタイおよびインド・パルティア時代二十五枚、クジュラ・カドフィセス、ウィーマ・カドフィセスのクシヤン前期 (Rois de la I^{re} dynastie Kouchane) は一〇四枚、カニシカ、フヴィシユカ、ヴァスデーヴァにいたるクシヤン盛期は一一三枚、クシヤン後期 (Rois de la II^e et de la IV^e dynastie Kouchans) の貨幣は四十二枚をかぞえる。またタキシラの方形貨やササンのホスロー二世（五九〇—六二七年）の銀貨がある。ササン朝の銀貨はこの他シャプール二世（三五〇—三五八年）の銅貨が知られており、また一九四六年の発掘では、王宮の入口にあるA室のちかくでホルムズド一世（二七二—二七三年）の銀貨が発見されている。この地域におけるササン朝ペルシャの勢力は幾度かの間断があったが、その間この古城は使用されつづけていたのであろう。

「大唐大慈恩寺三藏法師伝」によると玄奘は、バーミヤーンより深山（ヒンズクシュ山脈）をこえ、カピシ（迦畢試）国についた。ベグラムは、カピシ国の都城だと考えられるが、かれはこの都城については記さず、城の東にある沙落迦寺にとまっている。ガンダーラのカニシカ王が中央アジアよりインドにわたる大帝國を建設した際、中国の西の辺境にある国王がカニシカ王に王子を人質に送った。この王子は、カニシカ王に好遇され、冬はインドに、夏はカピシに春、秋はガ

ンダーラに住んだという話を玄奘はここできいている。カニシカ王はガンダーラを主な首都とし、カピシまたはインドのマトウラーには副王または太守クラスが駐在した可能性がある。一、二世紀のベグラムは、先にみるようにインド、中国、ローマ世界の物資をあつめ、まさに東西交渉の中枢の地位をなしている。ガラス器や青銅製品はイタリー、ローマ時代の都市ボンペイの出土品と同類で、ベスピアス山が噴火した紀元七十九年以前の製作になるものとローランド B. Rawland⁽¹⁸⁾ が指摘している。ボンペイでは逆にインド製品とおもわれる象牙女神像が発見されている。「エリュトウラー海案内記」にバルバリコン港にローマ世界よりの輸入品の一つにガラス器があるが、これらは、玄奘のいうインド(マトウラー)、ガンダーラ、カピシなどの都市に、さらに輸出されたものとおもわれ、ベグラムの発掘はまさにそれを実証したというべきであらう。

註

- (1) 高田修「インドの仏塔と舍利安置法」〔仏教美術史論攷〕所収)一九六九年。
- (2) Sir J. Marshall, "Taxila" Vol. I~III. Cambridge. 高田修「タクシラの発掘とガンダーラ美術の始原問題」(考古学雑誌 三八)一九五二年。第一表はこの論文中の表を使用させてもらった。
- (3) F. A. Allchin; Archaeology and the Date of Kaniska: the Taxila Evidence. (Papers on the Date of Kaniska, edited by A. L. Basham) Leiden, 1968.
- (4) ウーラー「ローマ帝国の膨張」
- (5) D. W. Macdowall; Numismatic evidence for the Date of Kaniska (ibid. edited by A. L. Basham) Leiden, 1968. J. A. S. B. 1834.
- (6) D. W. Macdowall; ibid.
- (7) W. Simpson; Buddhist Architecture in the Jelalabad Valley (Transactions of Royal Institute of British Architects 1879~80)
- (7) D. B. Spooner; Excavations at Shah-j-i-ki-heri, A. R. A. S. I. 1908~1909, p. 38~59.

高田 修「カニシユカ大塔及び舍利容器の再検討」ーガンダーラ美術の展開における様式的指標としてー(『美術研究』一八一) 昭和三十年。

- (8) J. Bartoux; Les fouilles de Hadda. Figures et figurines. Album photographique. M. D. A. F. A. Tome III, Paris.

J. Bartoux; Les fouilles de Hadda. I. Stupas et Sites. Textes et Dessins. M. D. A. F. A. Tome IV, Paris.

- (9) 水野清一編「エウナンペン・ナギンメル」(京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告) 京都、一九六八年。

- (10) D. W. Macdowall, *ibid.*

- (11) B. Rowland; "Gandhara" and Early christian Art: the homme arcade and the date of the Bimaran Reliquary", *The Art Bulletin* 28, 1946.

- (12) D. W. Macdowall, *ibid.*

- (13) 水野清一編「ニサフルルビシヤララービーザーカプール」(京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査報告) 一九七一一年。

- (14) H. H. Wilson; *Ariana Antiqua*, London. 1841.

- (15) J. Hackin; *Recherche archéologique à Begram* (Chantier no. 2 1937) M. D. A. F. A. IX, Paris, 1938.

J. Hackin (avec la collaboration de J. R. Hackin, J. Carl et P. Hamelin); *Nouvelles recherches archéologiques à Begram*, M. D. A. F. A. IX, Paris. 1954.

- (16) J. Hackin (avec la collaboration de J. R. Hackin, J. Carl et P. Hamelin); *ibid.*

- (17) R. Ghirshman; *Recherches archéologiques et historiques sur les Koushans*, M. D. A. F. A. Tome XII, Cairo, 1946.

- (18) エンシヤッハ・ローレンツ「エメル」(『アフガニスタン古代美術』所収) 日本経済新聞社、一九六四年。

- (19) J. Ph. Vogel; *Note on ivory statuette from Pompei* (Annual Bibliography of Indian Archaeology, Vol. XIII. For the Year 1938), Leiden, 1940.

前にものべたように、タキシラでは七六二九個の発見貨幣の中で、アウグストゥスとティベリウスの銀貨が二枚、ベグラムでは三八〇個の発見貨幣の中にはローマ貨幣は見出されなかった。発見されたものは、マニキアラ、アヒンルボツシュのストゥーパのように仏教寺院の塔の舍利容器の中に収められており、特殊な埋納を示し、実際に使用されたとはみとめがたい。これはこれらの地域にクシャン朝がおり、通貨を自ら鑄造しており、ローマの貨幣の通行の必要を認めなかったものと想定されるのである。

一世紀前半のクシャン朝の祖、クジュラ・カドフィセス（後漢書西域伝にいう丘就卻）は、これまでの王朝にならって銀貨、銅貨を鑄造した。これにはギリシャ語とその文字（表面）、カロシュティ文字とプラークリット（裏面）でそれぞれ「王」、「大王」、「諸王の王」の称号を記している。その子、ヴィーマ・カドフィセス（閼膏珍）は、マトゥーラに進出した。かれは銀貨を廃してはじめて金貨を鑄造している。クジュラ・カドフィセスの貨幣はカーブル川流域より西パンジヤブにかけて分布している。

タキシラの発見でクジュラ・カドフィセスのものとみられる銀貨三枚が発見され、表面にインド・ギリシャの王ヘルマイオスの胸像とギリシャ文字、裏面にカロシュティ文字でクジュラの記銘のあるもの、また表面にヘルマイオスの胸像と表裏ともに二種の文字でクジュラの名をもつものがある。このことから高田修氏¹は「インド・ギリシャ諸王に代ってクジュラの勢力の漸次増大していった事情が如実に反映している」とのべている。

クジュラの銅貨の中に、ローマの貨幣を模したもののあることも注意される。表面には左むきの王の胸像がみえるが、これはローマ貨幣の模造であることは疑いない。これまでアウグストゥス帝のデナリウス貨（前四年―後二年）の模造とされていたが、現在ではアラン（I. Allan）の提唱²によりクラウディウス帝 Claudius（後四一―五四四年）の模造にあて

ことができる。つづくカニシユカ大王の時は、金貨、銅貨のみで銀貨はみることができず、フヴィシユカ、ヴァス・デーヴァ王まで金貨、銅貨の二者のみで銀貨は鑄造されなかった。

ベグラム発見例³からいえば、クシヤン代になっても、インドーギリシャ、インドースキタイおよびインドーバルティアの貨幣は全貨幣三四〇個の中で七四個を数える。

「エリュトゥラー海案内記」では、インド西岸のバリユガザで、一世紀の中葉、アポロドトス、メナンドロスの貨幣が通行していたことを記しているが、ベグラムでもアポロドトス、メナンドロスなどインドーギリシャの貨幣が現実に出土しており、クシヤン朝になっても依然、前代各地域で発鑄した銀貨を襲用していたことは確実である。

ヴィマ・カドフィセスが金貨を発行したことは、クシヤン朝が遠距離貿易、商業の発展によって広いその領土に世界通貨として必要としたものであろう。ヴィーマの金貨はローマのアウレウス金貨を模範として鑄造したもので、一二三・二グレイン（八・〇グラム）の重さを基準とし、品質も純金分九〇％以上で、きわめて安定⁴していた。

いまローマ、アウグストゥスの金貨⁵ Aureus をみると、鑄造地ローマが一二二・六七グラム（七・九五グレイン）、スペインが一二〇・八五グラム（七・八三グレイン）、ルグドヌム（リオン）が一二二・〇二（七・八四グレイン）、東方鑄造が一二〇・一四グラム（七・七八グレイン）の平均値をはかる。

クシヤン朝のヴィーマカドフィセス王の金貨は、大形品は二四二グラム（一五・六八グレイン）、小形品一二二グラム（七・九〇五グレイン）、カニシユカ王の金貨は一二二グラム（七・九五グレイン）、フヴィシユカ王の金貨は一二一グラム（七・八四〇グレイン）、一二二グラム（七・九〇五グレイン）、ヴァスデーヴァ王の金貨は一二一グラム（七・八四〇グレイン）をはかり、ローマのアウレイ金貨とはほぼ重量が同じである。また、クシヤン朝金貨の王像、諸神像のまわりにみる連珠文圏は、あきらかにローマ貨幣の王像のまわりにみるものである。

このようにクシヤン朝では、ローマの金、銀貨に基準をあわせており、金貨はローマの金貨よりも強力であつた。ただ

クシヤン朝では、自らの強力な幣制をもっていたため、ローマの貨幣でクシヤン帝国内に入ったものは流通することなく改鑄されたと説かれているのは容易にうなずけることである。

註

- (1) 高田 修「仏像の起源」第4章「西北地方の史的背景」一九六七年。
- (2) J. Allan; *A Cambridge Shorter History of India*, Cambridge, 1934, p. 74.
- (3) R. Ghirshman; *Recherches archéologiques et historiques sur les Konshans* M. D. A. F. A. Tome XII, Cairo 1946.
- (4) 山崎利男「クシヤン朝とグプタ帝国」三「クシヤン朝下の商業（岩波講座・世界歴史三・古代⁽³⁾）一九七〇年。
- (5) H. Mattingly; *Coins of the Roman Empire in the British Museum*. Vol. I. Augustus to Vittelius, London, 1965.
- (6) R. B. Whitehead; *Catalogue of Coins in the Panjab Museum, Lahore*, Vol. I. Indo-greek coins. Oxford, 1914.
- (7) ロー貨幣とクシヤン朝貨幣を比較研究したものに、次の論文がある。
D. W. Macdowall; "The Weight standards of the Gold and Copper Coinage of the Kushan Dynasty from Yima Kadphises to Vasudeva", *Journal of Numismatic Society of India*, Vol. 22, 1960.
D. W. Macdowall, "Numismatic Evidence for the Date of Kaniska", *Ibid*

6

ソ連領中央アジアで、バルティア初代の都、古(旧)ニサの宝物庫⁽¹⁾では、バクトリア、バルティアのミトリダテスの銀貨とともに、エジプトからの石製用具、ローマ・シリア産のガラスが発見された。これは前三―一世紀のものをふくんでいる。新ニサ都城に、後一世紀の貴人の墓があり、ここから金糸刺繍の織物片、牧神の頭部のある青銅製のローマの燭台などが発見された。またバルティアの東方の根拠地メルヴのエルク・カラ古城からローマのガラスなどが発見されている。これらはローマとの交渉によって得られたものにちがいない。

後一—三世紀、アフガニスタン、ソ連領中央アジアの南部およびアフガニスタンは、クシャーン朝の領域となった。マッソンはメルヴ（バルティア領マルギアナ）およびホレズム地方はバルティアの政府またはクシャーン朝には依存せず、むしろ独立的であったと解しているが、この地域をのぞいて、ほぼクシャーン朝の治下に入っていたと考えることができる。

ソ連の考古学者スタヴィスキー（B. Stavitskiy）は近年の中央アジアにおけるクシャーン朝遺跡の調査から、ローマの貨幣、中国の貨幣、エジプト・シリアのベースト・ガラス製品、中国の鏡や、地中海の陶器などが発見されたことを報告している。

クシャーン朝の遺跡や墳墓に中国の漢鏡の発見されることが少なくなく、タシュケント市近郊ブレフスコイエ Brevskoye は一世紀のクシャーン朝下の古墓である。遺骸に接して前漢式内行花文星雲鏡が発見されている。（樋口隆康氏教示）、またウズベク共和国レニナバードの南方カヤラ・ガティ（Kayara-Gati）より方格規矩鏡（レニングラード、考古学研究所、ザドネプロフスキ氏教示、筆者実見）、またフェルガーナのカラ・ブイラク（Kara-Buirak）古墓は一世紀より四世紀の間のもので、内行花文鏡（レニングラード、エルミタージュ博物館蔵、筆者実見）などがある。クシャーン朝下の漢帝国側よりの資料についてはまた筆を改めることにしたい。

ヒンズクシュ山脈北側のアフガニスタン領ではいまのところローマ貨幣の出土は報じられていない。アムダリア（オクソス河）の北岸、ソ連領タジク共和国テルメス市の西北方のハイラバード・テペで、ジュコーフラの調査に際し、ネロ帝 Nero（五四—六八年）の貨幣とともにギリシアの勝利の女神ニケやラオコーンを形どったテラコッタなどが発見された。またタジク共和国の北部ウラ・チュペでは約三百個のローマ銀貨が発見されたが、その内二世紀に属する二十個が学者の手にのこった。

マッソンはドウシャンベのクシャーン期都城址よりディオニソス彫像のある青銅製首飾、サマルカンドのアフラシアブ（Afrosiab 古城より、ローマ様式の燭台、ローマ征服時のエジプト印章と装飾が出土したことを注意している。ローマ

の貨幣及び工芸品はクシャン期の遺跡より出土したもので、これらは完全にクシャン貨幣の流通圏に入っている。これらローマ貨幣、ローマ製品はバルティア經由というより、インダス河口、ガンダーラ經由の可能性がある。

バミールを東にこえた中国の新疆ウイグル自治区では、いまのところローマ貨幣の出土の報告はない。スタイン調査隊の採集した貨幣の中に、カルガリク Karghalik 発見のバルティアのミトリダテス王の銀貨一枚、ホータン(Khotan)発見のクシャン朝、ウィーマ・カドフィセス王一枚、ホータンおよびヨートカン(Yotkan)発見のカニシカ王の銅貨計三枚がある。バルティア初代の都はソ連、トルコマン共和国ニサにあり、ミトリダテス二世(前一二三—八七年)の時、その勢力は東にヒンドウクシュをこえ、インダス河流域に、西にエウフラテスの流域におよんだ。これはほぼ中国の前漢武帝の時代に相当する。クシャン帝国の勢力が新疆省におよんだことは、先にのべた玄奘の記録にもつたえられている。ローランやミラーンなどの仏教寺院もクシャン期仏教美術の強い影響がみとめられる。ホータン、ヨートカンの貨幣も早くより西方との経済交流圏にあるとめてよい。ホータンなどに発見されるシノ＝カロステイ銭が榎一雄氏⁽⁷⁾によって中国側戦国末期秦の圓銭とバクトリア王国のギリシャ式貨幣の二つが基盤になって成立したとかかれていることは注意されてよい。

* * *

中国本土では、ローマ貨幣の発見について、一八八五年、ブッシェル⁽⁸⁾の報告にもとづき、桑原隲藏⁽⁹⁾、張星娘氏⁽¹⁰⁾が紹介している。これは山西省靈石県で発見されたというローマ銅貨で、ティベリウス、クラウディアス、ネロ、ネルヴァ、トラヤヌス、ハドリアヌス、サベナ(ハドリアヌスの皇后)、コモドゥス、ガリエヌス、アウレリアヌス帝のもの各一枚、ヴェスパシアヌス、アントニヌス・ピウス、マルクス・アウレリウス帝のもの各二枚でティベリウス(紀元一四—三七年)がもっとも古く、アウレリアス帝(二七〇—二七五年)がもっとも新しい。この十六枚のものの外に、フランクとポーランド国王シギスムンド三世(Sigismund III)の銅貨(一五八九年鑄造)一枚をふくみ、ブッシェルはこれを後世混入したものと考えている。この山西省靈石県発見貨幣について、中国科学院考古研究所の夏鼐氏⁽¹¹⁾は、貨幣が、紀元一四年より二七五年まで

の十三の皇帝の銅貨が一枚か二枚であること、一五八九年の銅貨をふくむことから、明末清代のころ西洋から来た伝道士がもつて来たものがたまたま山西の人の手に入って、山西出土を伝えたものでないかという疑問を提出している。私も夏尊先生とおなじく、十三の皇帝の貨幣が一、二枚ずつあるのは不自然だともう。最後のアウレリアヌス帝の年代は、中国でいえば西晋代にあたる。三世紀後半より四世紀の初頭にかけ西晋の勢力が新疆のローランよりニヤに及んだことは、この地域より発見される木簡文書でたしかめられる。しかし、クシヤン帝国は三世紀に入るとしだいに衰微し、ササン・ペルシャのアルダシール一世（二二六―二四〇年）の軍隊はバクトリアよりガンダーラ、西部パンジャブに侵入し、またシャプール一世（二四一年―二七三年）の軍隊はバルティアのアルタバナヌス五世を破り、クテシフォンを占領し、さらに東はインダス川、北はサマルカンド、タシュケントに入り、クシヤン帝国を滅亡させている。二六〇年にはエデッサにローマ軍を破り、ヴァレリアヌス帝（二五五―二五九年）をはじめ七万のローマ軍団兵は捕虜となり、イラン高原におくられている。バクトリア、ファールイズム地方ではクシヤン時代の貨幣はヴァスデーヴァを最後とし、その後のものは稀であり、ファールイズムではアルダシール一世の貨幣を模したものが通行し、その支配下にあったと考えられている。

シャプール二世（三一〇―三七九）、アルダシール二世（三七九―三八三年）、シャプール三世（三八三―三八八年）代銀貨がくみあわさったセットが、アフガニスタンのテペ・マランジャンおよびフォンドキスタン、中国の新疆ウイグル自治区のカラ・ホージャ¹⁶から出土しており、テペ・マランジャンではクシヤノ・ササンの金貨を伴出している。五世紀の初頭、キダラ・クシヤンがおこり、はじめはバルクに、後にはベシヤウルを都したので、この三代の貨幣の埋蔵はキダラの侵入によって、一つの時期を画することができるのではないかと私は考えている。ササン・ペルシャの興起によってクシヤン帝国の故地にはササン・ペルシャが国際貨幣として登場しており、いまのところ、これらにローマ貨幣は全くともなっていない。こうした情勢からも三世紀後半を下限とするローマの貨幣が山西省で発見されたというのは説明できないところが多く、現在のところ中をつなぐものがないというほかはない。



第2図 ローマ・アントニウス
＝ピウス (A.D. 152) 金貨 (ヴェ
トナム・オケオ遺跡発見)

これに対してヴェトナム南部、メコン川の支流バサック湾のあいだの平野にあるオケオ遺跡から、フランスの学者マ
ルレー (J. Mallerey)⁽¹⁷⁾ 氏によって発見された金貨は明らかにローマのものである。一つはアントニウス・ピウスの金貨
でその即位一五年 (一五二年) の銘があり、他の一つは表面が模糊としていてアントニウス・ピウスか、マルクス・アウ
レリウス・アントニウスが決定できないが、そのいずれかにあたるもので、紀元一三八年より一六一年の間におくべきも
のとされている。これは金貨とよぶより、貨幣形装飾品 (メダイユ) ともいえるものであるが、インドシナ半島において
はじめて現実にローマ貨幣が発見されたのである。ここから南インドのアマラヴァティ様式の仏像や漢代中国の鏡⁽¹⁸⁾が発見
されており、オケオ遺跡は一世紀より六世紀まで栄えた扶南国の海港都市で、メコン川流域の象牙・犀角・果物など豊富
な物産をあつめ、インドシナ半島の突端にある地の利を生かして、中国と南海の中継貿易を果していたとおもわれる。
「後漢書」によると、後漢の桓帝 (一四七―一六七年) の時、南海經由で、天竺より、二度にわたって来献し、ついで延
熹九年 (一六六年) には日南郡の徼外より大秦王安敦の使と称するものが象牙、犀角、タイマイを献じたという記事があ
る。大秦はローマをさすことは明らかであり、安敦を当時の皇帝にあてればマ
ルクス・アウレリウス・アントニウスとなる。実際にローマの使いがきたもの
か、そう語ったものか決定しがたいが、オケオにおけるアントニウス・ピウス
などの金貨の発見はこれと照応すべき重要な発見である。

タイでは、セデス氏 (J. Cedes) によればボン・トック遺跡よりアマラヴ
アティ様式の仏立像が二世代のローマ・アレクサンドリア式の青銅ランプ⁽²⁰⁾とと
もに発見されている。またナコンパトムからはローマ式ランプとテラコッタが
非公式ではあるが、スパン・ブリ地方から二六八年より二七〇年にあたるロー
マ式ランプとテラコッタが

マの貨幣（クラウディウス Claudius か）が発見されたことを伝えている。ポン・トゥク遺跡出土のローマ・アレクサンドリア形式のランプは、タイのドヴァラヴァティ時代（Dvaravati period）の土製ランプに影響を与えているという²²見解のあることもあげておく必要がある。

アレクサンドリアの商人の案内書である「エリュトゥラー海案内記」にはそのもっとも東の果てにある黄金島には「エリュトゥラ海のすべての場所のなかでもっともよい亀がいる」と記されており、村川堅太郎氏は、これまでの説を紹介して、クリューセをマレイ半島にあてている。ヴェトナムやタイで見えられたローマ貨幣は、インド西岸、東岸、セイロン島より南海をわたってここに伝えられたものであることは疑いない。「後漢書」にいう大秦王安敦の使者と称するものが、中国にアントニヌス・ピウスまたはマルクス・アウレリウス・アントニヌスの貨幣はもって来たとするれば、広東または後漢の帝都洛陽には将来この種の貨幣が発見されないとはいえないであろう。

註

- (1) V・マッソン著、加藤九祚訳「埋もれたシルク・ロード」（岩波新書）5、パルティア王の宝物庫、一九七〇年。
- (2) B. Slavsky; 'The Study of Kushan Central Asia ("Papers on the Date of Kaniska", edited by A. L. Basham) Leiden, 1928.
- (3) 香山陽坪「砂漠と草原の遺宝」（角川新書）八一頁、昭和三十八年。
- (4) V・マッソン著「前掲書」九六頁。
- (5) 同右「前掲書」一六二頁。
- (6) Sir, A. Stein; Serindia, Vol. III.
Sir, A. Stein; Innermost Asia Vol. II.
- (7) 榎一雄「所謂シノ・カロシヤティー銭について」（『東洋学報』四二—三所収）一九五九年。
- (8) W. S. Bushell; Ancient Roman coins from Shansi, in the Journal of the Peking Oriental Society, 1885.
- (9) 桑原隲麟「隋唐時代に支那に来往した西域人に就て」（『東洋文明史論叢』所収）一九三四年。

- (10) 張星狼「中西交通史料匯篇」第一冊。
- (11) 夏鼐「咸陽底張濟隋墓出土的東羅馬金幣」(『考古學論文集』所収)一九六一年。
- (12) Ed. Chavannes; Les documents chinois découverts par Aurel Stein dans les sables du Turkestan oriental, Oxford, 1913.
- H. Maspéro; Les documents chinois de la troisième expédition de sir Aurel Stein en Asie central, Londres, 1953.
- (13) 岡崎敬「ササン・ペルシア文化東伝の編年試論」—貨幣考古学の立場から—(『オリエンツ』十一の三・四号)一九六八年。
- (14) R. Curiel et D. Schlumberger; Trésors monétaire d'Afghanistan (MDAFA, Tome XIV), 1953.
- (15) J. Hackin; The Buddhist Monastery of Foudukistan (Journal of Greater India Society.) Calcutta. Vol. VII 1940.
- J. Hackin; La Répartition des monnaies anciennes en Afghanistan. (Journal Asiatique) 1935.
- (16) 夏鼐「中国最近發現的波斯薩珊銅幣」(中国科学院考古学研究所編輯)一九六一年。
- (17) L. Mallet; L'Archéologie du Delta du Mékong. Texte Vol. I~II, Planche Vol. III, Paris. 1959~60.
- (18) 梅原未治「オケオ出土の夔鳳鏡」(『史學』三七—三)一九六四年。オケオ出土の夔鳳鏡はわが福岡県須玖岡本出土のものと同様式であり、この外、方格規矩鏡の破片が発見されている。
- (19) 山本達郎「古代の南海交通と扶南の文化」(『古代史講座』13「古代における交易と文化交流」所収)昭和四十一年。
- 岡崎 敬「民族文化と東西文化の交流」—石塞山とオケオの遺跡(『世界考古学大系』8・南アジア)昭和三十六年。
- 岡崎 敬「南海をつうずる初期の東西交渉」(『護雅夫編「漢とローマ」(平凡社)昭和四十五年。
- (20) J. Coedes; Excavations at P'ong T'uk in Siam, Annual Bibliography of Indian Archaeology 1927. Leiden. 1929.
- (21) バンコック国立博物館『Fine Art department のサン・ヨー・ディ教授(Prof. Chin You-di)の教示によつて』
- (22) Guide to the National Museum, Bangkok, Thailand, Third Edition 1970.

紀元の前後、西には地中海を中心にローマ帝国が生れ、東アジアには漢帝国が統一され、長い平和の時代を現出してい

た。漢帝国はローマ側には「エリュトウラー海案内記」に見えるようにセレス *Seres* として知られ、ローマ帝国は漢側より大秦国として認識されていた。大秦国は「後漢書」西域伝にくわしく記されている。

「大秦国は一名犁鞞といい、海西に在るをもつて、また海西国と言う。」

「金銀を以て錢と爲し、銀錢十が金錢一に當る。安息・天竺と海中で交市し、利十倍す。其の人質直、市に二価無し。穀食常に賤にして、国もつて富饒なり。隣国の使その界首に到る者、駅に乗って王都に詣る。至ればすなわち給するに金錢を以てす。其の王常に漢に通ぜんと欲す。安息、漢の綸綵をもつてこれと交市せんとし、故に遮闕して自ら達するを得ず。」

また「三国志」第三十魏略所引の大秦伝には「終いに盜賊なきも、但猛虎、獅子有りて害をなす」、とみえる。大秦国が漢の絹のことは知って、これと交通しようとして安息(バルティア)に妨害されたこと、天竺(インド)、安息と海中で交市したこと、また海西にあり、海西国ということなど、また「大秦伝」に記す物産に「エリュトウラー海案内記」に記すものと比較しうるものが多いことと、先にのべた考古学的資料ともあわせて考えると、大秦国はローマ帝国下のエジプトとなり、犁鞞はアレクサンドリアと解釈するのがふさわしいことになる。ヒルト(E. Hirt)は大秦国をシリアにもとめ、ペトラ(Petra)の土名レケム *Rekem* を犁鞞と解釈した。白鳥庫吉氏はこれに対し、大秦国をローマ、犁鞞をアレクサンドリアにもとめられたが、近時の考古学上ことにローマ貨幣の分布からみても、この説はうごかしがたいものがあるとおもう。

かくして、ローマの金、銀貨は東方貿易の代償として、一つはインダス川をさかのぼってクシャン帝国に流入し、一つはインド西南岸、東南海よりセイロン島に集中した。後者では、いまだつよい王権、発鑄の貨幣もなく、そのまま通行しそのながれは、さらに東方マレー半島(クリューセ)をへて、タイ、ヴェトナムにおよんだ。前者ではそのころクシャン朝がおこり、貨幣制度が確立しており、ローマの貨幣は流入しても熔解されて、ほとんど使用されることがなかった。わ

ずかにストゥーバの舍利容器に埋納されるにとどまったのである。私がカプールで購入した一枚のローマ銀貨も、あるいはその類であつた可能性も考えられるのである。近時のソ連領中央アジアからも一、二世紀のローマ銀貨が発見されているが、これはクシヤン朝の領域であり、バルティア経由ではなく、むしろ、先にのべた海路よりクシヤン朝の領域に入つたものであらう。

いま、パキスタン、アフガニスタン、クシヤン朝領域内のローマ銀貨をみると、名称のわかるものはアウグストゥス、ティベリウス、ネロ、ドミティアヌス、トラヤヌス、ハドリアヌスの各皇帝およびハドリアヌス帝の妃サベナであり、中央アジアのハイラバード・テベではネロ、ウラ・チュベでは二世紀に属するローマ銀貨があつたとされている。共伴のクシヤン朝銀貨もクジュラ・カドフィセス、ウィーマ・カドフィセス、カニシュカ王のものが多く、クシヤン朝盛時の一、二世紀代のものに限られ、三世紀に降るものは現在報告されていないのは注意されるところである。三世紀代になると、アルタクシェール一世（二二六―二四一年）およびシャープール一世（二四一―二七一年）の軍は、クシヤン朝の故地に侵入し、クシヤン朝の勢力は急激に衰微した。

ギルシュマンによるとベグラム第二層から発見される最も新しい貨幣はクシヤン朝最後の王であるヴァスデーヴァ Vasudeva のものである。この時、ベグラムの都市が破壊されており、これはシャープール一世の軍の侵入によるものと解釈されている。このヴァスデーヴァは「魏志」明帝紀、太和三年（二三〇年）十二月の条に、魏より「親魏大月氏王」の印綬をおくつた大月氏王波調に比定することができる。三世紀後半以降（中国の西晋代）は、一―二世紀にくらべて陸上のシルク・ロードによる東西交渉が下降を辿つたとおもわれる。「後漢書」および「魏略」の西域伝に、ローマ領エジプトをさす大秦国が、もっとも詳細に記されるのはこうした事情によるものであらう。

註

(1) F. Hirth: China and the Roman Orient.

アフガニスタン・カプール市購入の一枚のローマ銀貨（岡崎）

（2） 白鳥庫吉「大秦国及び仏菴国に就きて」（『西域史研究』下、所収）昭和十九年。

*

*

*

一九五五年と五九年の二回、これまでのべたガンダーラ、スワットよりバクトリヤに至る東西交渉の交会点を訪れ、五年にはその後イランに出て、ペルシャ湾、インド洋、南シナ海など南海をへて帰国、一九六六年にはソ連領中央アジアの地を訪れることができた。これらの地を歩くことができたのは、多くの師友の好意によるものであるが、水野清一先生の御推輓がなければ、私も西域の地域までの道程視野をもつにいたらなかったにちがいない。

一九五九年、先生は自ら調査の指揮をとられ、一九六七年にいたる八年間、調査の領域を着実にひろげていかれた。私はその後、名古屋大学より九州大学にうつり、なんらの御手伝いをすることができなかった。

一九七一年五月、水野先生はゆくりなくも道山に帰され、できたばかりの報告『バサワールとジェラールバード・カブール』をしっかりと抱いてあの世に発っていかれた。この中にアフガニスタンのジェラールバードよりカブールの間の石窟群、寺院・ストゥーパ群の踏査報告がある。マッソンが黄金製舍利容器を発見したビーマラン大塔は幸いにさがしだされた。くずれおちていたが仏塔のおもかげをのこしていた。ローマの金貨、カニシユカ王などクシャーン朝の貨幣を出土したアヒン・ポッシユの塔はすぐ近くまでいきながら、日時の関係で断念したと見えている。この報告にも先生のもつ粘りと丹念さが最後まで貫かれている。中国の響堂山石窟、龍門石窟よりはじめ、仏教美術の淵源を西域にもとめ、かつての入竺僧のように峻険沙漠をこえ、その道を幾度か往来踏査し、その途上に仆れられたのである。

小生は、先生の御生前、なんらの著作報告をさし上げることが出来なかった。玄奘はかつて那揭羅曷国（ジェラールバード近郊）、健陀羅国（ペシャワール近郊）の寺院を巡拝し、金、銀、絹をささげたが、私はかつて見聞することのできた資料の中からカニシユカ王の舍利容器一具、ローマの金銭、銀銭二葉の写真とささやかな論攷を呈し、先生の供養とすることを御許し願いたいとおもう。

（昭和四十六年十二月十日）



PL. 1 カニシュカ王舎利容器 ペシャワール博物館（岡崎撮影）



PL. 2 カニシュカ王舎利容器（裏面） ペシャワール博物館蔵

A Roman Silver Coin purchased at Kabul in Afghanistan

—New Materials on the Distribution of Roman Coins
in Pakistan, Afghanistan, USSR and Far-East—

Takashi OKAZAKI

(1) June 1955, I purchased a Roman silver coin at a bazar (a market) at Kabul in Afghanistan. The head of the coin bears the inscription; CAESAR AVGVSTVS. On the tail, the goddess of victory with spread wings has a round shield. Caesar Augustus reigned 30 B.C.—14 A.D. This coin is regarded as cast in COLONIA PATRICIA (Spain?).

(2) Roman coins are discovered in the ancient cities and ruins of northwestern Pakistan (northwestern India before the World War II) and Afghanistan. Especially they are found in the casket of Buddhist stūpa.

- a. Taxila, Darmarājika Temple, stūpa No. 4. Azilises (40—15 B.C.)
AR 1, Augustus AR 1.
- b. Taxila,
Tiberius AR 1.
- c. Rawalpindi, Manikyara stūpa (Court's Tepe).
Roman AR 7,
Kushan (Kujula Kadphises, Wima Kadphises, Kanishka) AE 12.
- d. Punjab, Hazara district, Pakli.
Augustus AR 12, Tiberius AR 2, Hadrianus AR 1.
.....
- e. Jelalabad, Ahin-Posh stūpa (gold casket).
Domitianus AV 1, Trajanus AV 1, Sabina, Queen of Hadrianus AV 1.
Kushan (Wima Kadphises, Kanishka, Huvishka) AV 17.

(3) In Central Asia of USSR, the archaeologists of Soviet Russia recently pay attention to Roman coins.

- a. Tadzhik SSR, Termez, Hairabad Tepe.

Nero AR 1.

b. Tadjik SSR, Ula Tube.

Roman AR (almost 2. century) circa 300.

(4) "Periplus Maris Erythraei", written in the first century, described the Oriental trade of Rome of which the starting point was Alexandria. According to the book, Roman coins found way into Barbarikon (at the mouth of Indus river), Barygaza (now Broach at the mouth of Narbada river), Muziris (Kanganur at present), Nerkunda (Kottayam at present) and other cities. In the regions of Muziris and Nerkunda, there was no powerful regal authority that could cast coins. Therefore Roman coins were used as currency. In these regions many coins are discovered now. Behind Barbarikon, there was the Kushan Empire. The Empire entered into the area of money economy (especially silver coin economy). We think that many coins which flowed into this region were withdrawn and melted. Some of them were offered to the Buddhist stūpas.

It is most probable that the Roman coin purchased by me at Kabul had been kept in a stūpa. In the ruins of Kushan period at Begram no Roman coin was discovered, but glass articles of Roman Syria, lacquered wares made in China of the Han period and ivory manufactures of India were discovered. In Central Asia of USSR, Roman coins, Chinese coins and mirrors of the Had period, and glass articles of Roman Syria were found out. Kabul was a city on the Silk Road that connected Rome with Han. I report here a Roman silver coin of Caesar Augustus discovered by me in this city.